

我、COVID-19 の陰の谷を歩むとも

- コロナ時代の音楽家と社会貢献

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科講師

箕口 一美

この原稿を書いているのは 2020 年も余すところ 7 日あまり、東京は新型コロナウイルス感染症(以下 COVID-19) 大流行の第 3 波が、未だ感染者数のピークを迎えることなく拡がりつつけている時期である。2 千をなかなか越えなかった死者数もわずか 1 ヶ月で 3 千人の大台に乗った。大流行予想の警告が半年前には発せられていたにも拘わらず、冬の感染爆発を無為無策のまま迎えたこの都市を覆う空気は、もっと大きくもっと過酷な「何か」が襲来する予感に、萎縮と投げやりが交錯して、重苦しい。

パンデミックの 1 年が終わろうとしている。今年の始め頃のことがこんなに遠く思えるのは、しかし、初めてではない。2011 年、東日本大震災の年の瀬もそんな気持ちになったものだ。ただ、あのときより事態を複雑にしているのは、この災厄が全世界同時に起こったという事実。現状の感染状況の違いはあれ、この地球上の人類が等しく一つの脅威に晒されていることをちゃんと理解出来ているか、自信がない。ひとつだけ、確かに言えることは、昨年の中頃とは全く状況が変わってしまっていて、旧に復することは、当面ないだろうということだけだ。当面って、いつまで？誰も答えを持っていない。

クラシック音楽界隈で生きている人間たちには、この年の瀬はなおさら、変わってしまった世界を痛感させる。「第 9」がない。いや、あるにはあるが、わずかだ。これまでならば 12 月のコンサートカレンダーはこの曲で埋め尽くされていた。まして楽聖の生誕 250 周年の誕生月の今頃は、日本中が、プロもアマもこぞって歌い上げる「歓喜の合唱」にわきたっていたはずだ。「歓喜」どころか、合唱は感染を広げる恐れが最も高いジャンル指定を受けたかの如く、歌声の聞こえない、静かな 12 月になってしまった。

密かに「2/26 禁令」と呼んでいる、大人数が集まるイベント自粛要請を境に、音楽家たちは、一気に演奏の機会を喪っていった。追うように発せられた緊急事態宣言で、リハーサルすらともになくなった音楽家は、突然出来た、音楽することのできない「空白の時間」と、どんなふうに対峙したのだろうか。

その一々を取り上げるのは本稿の趣旨ではない。ただ、「音楽家自身の社会的役割としての社会貢献・社会参画」について何を書くにしろ、今音楽家が置かれている文脈に触れずには進められない。なぜなら、事態はますます悪くなる気がしないからだ。

COVID-19 パンデミック禍において、ドイツ政府が芸術家に対して行った支援策がたびたび取り上げられ、賞賛されている。それにひきかえ我が国は...その論調を聞くたびに、「比べる相手を間違えている」と思う。感染状況の報道も欧米に偏りがちな日本では報道される由もないが、6月14日付のシンガポール主要紙「ストレイツ・タイムス」日曜版に掲載されたアンケート結果に、アジアの芸術関係者の間で衝撃が走った。曰く、「コロナ禍で最も必要性が低い職業トップ5の第1位は、芸術家」
<https://str.sg/JPC2>

回答者の71%が芸術家を non-essential と認定したのだ。

一読、思ったのは、同様のアンケートを今日本で行っても、似たような結果になるのではないかということだ。選択肢の中にアーティストがあれば、疑問も躊躇いもなく、それを選ぶ人が7割いても、私は驚かない。今そこにある危機的状況の中で、芸術家が果たす役割や社会的必要性をみんなが認め、共有出来るような社会ではない、という意味において、日本は間違いなくアジアの一員であり、ドイツの芸術家たちが社会に受け入れられている文脈とは、比べようがない。

コンサートホールの裏方として長年音楽家たちの創造活動としての演奏会を支えてきた者として、芸術家である音楽家たちが「不要不急」の存在扱いされてしまうのは、正直言って、悔しいし、悲しい。9/11のマンハッタンでも、3/11の東北でも、音楽家たちは、その惨禍の中で果たせる役割を見だし、社会的プレゼンスを示すことが出来ていた。ただ、今度は様子が違う。音楽家同士が集まることも、音楽を聞きたい人たちに集まってもらうことも、ライブの臨場感を味わうことも、感染症対策の見地からは御法度。音楽家は、特にクラシック音楽のように、その存在意義をライブに置くジャンルの音楽家は、手足を縛られてしまったも同然、自らもまたコロナ禍の被災者として支援を待つことになる。

そして、社会の複雑な機構がスムーズに動いていくのに不可欠な、骨と骨の間の軟骨成分のような仕事をしてきた人たち、例えば、物流の末端を担う仕事、飲食業、婚活斡旋、受付代行(身近なところではホールのレセプションистやチケットセンターのオペレーター)をはじめとする多種多様のサービス業、仲卸や中小零細の下請け製造業などから職を失っていく、生活に困窮する現状に直面して、音楽家もまた、次々と消えていく仕事に怯え、潜在的失業者の列に加わりつつあるのか。

コンサートホールでの公演を再開する努力は、ゴールデンウィーク明けの緊急事態宣言解除以降辛抱強く行われてきている。とはいえ、感染症対策のために費やす経費とマンパワーは、主催者にも会場提供側にも想像以上の負担を強いていることも事実だ。終わりが見えない現状は、ここも同じ。新年度を迎える4月以降の展望を持ちようがない。

首都圏をみている限り、COVID-19 流行以前の形で、音楽家が生きていく環境は戻ってこない。当面なのか、今後はずっとなのかについては、誰も何も言えない。少なくとも、2020年の終わりから見える景色は、以上の通りだ。

生は昏く、死もまた昏し-グスタフ・マーラー「大地の歌」の終曲が耳に甦る。こんなときでも、音楽は今この状況を的確に表現してくれる。そして、このフレーズの先に待っている展開が、ズタズタになった心にどれほど沁み込んでくるのかも良く知っている。中止になった今年のフランス・サン・ドニ音

楽祭が、無観客、無料で配信したマキシム・パスカル指揮 Le Balcon の室内楽版「大地の歌」は、聖堂から世界へ音楽家たちの心を込めた演奏とともに、音楽という芸術が、人が前を向いて生きていくために、essentialであることを静かに伝えていた。その配信を、カナダで、日本で、他のいくつかの都市や国で聞いた人たちが、Facebookでその感動を語り合い、分かち合った。

COVID-19も悪いことばかりではない。さもなくば、この音楽がオンラインで世界を駆け抜けることもなかっただろう。見ず知らず同士が、オンラインで感動を語り合うこともなかっただろう。暗さを増す世界の中で、光明のような、全く新しい経験だった。音楽の力、という、2011年には散々聞いた言葉が、違う意味合いと文脈で立ち上がる。

Stay Homeの日本版ロックダウンの間、多くの音楽家がオンラインに傾注した。音楽は聴き手がいって初めて音楽だ、という思いは変わらず、でも会えない聴き手に向けて、音楽家たちは、自らの表現したい気持ちに乗せて、オンライン配信を行った。

新しい仕事の形として、オンライン配信は今もどんどん進化している。この方向に、COVID-19の間をぬけた先の何かがある予感間違いなくある。

でも、ここで強調したいのは、あのとき、なぜ音楽家がオンラインに目を向けたかだ。既にインフラとして整いつつあったインターネット上の動画コミュニケーションは、手元にあるスマホを使えば、なんとかなりそうなツールだった。演奏から遠ざけられて、聴き手から切り離されて、でも音楽を表現したい気持ちが、誰かに聞いて欲しい、誰かに届けたい気持ちが、この一番手近にあるツールに向かった。もちろん、技術的な問題がその後山のように出てきたけれど、インターネットでつながった周りの人たちの助けも借りながら、たくさんの音楽家が、ほんとうにさまざまな形のオンライン配信を実現させ、ネット上には、感動と感謝の言葉が無量大数飛び交った。

音楽の力を発揮させる音楽家の、本来の姿がそこにあったのだと思う。それまでは、音楽という仕事を成立させる仕組のなかで、演奏だけしていればよかった音楽家が、切り離されて、ひとりでなんとかしなければならなくなったとき、自分の周りから、手近なところから、自分で道を拓いて、あるいは、助けてくれる人たちのコミュニティを作りながら、音楽表現の場を実現させる。

ネット上には、ホールが閉まって、コンサートが中止になって、やはり切り離されてしまった聴き手たちもいた。ふだんは、やれ響きの良し悪しだの、バランスがどうの、と口うるさい人たちも、普段着の音楽家たちの、分割画面からの演奏に聴き入っていたはずだ。届いていたのは音楽だけではなく、音楽家が聴き手につながりたい強い気持ち。遠く隔たっているのに、コンサートホールで聞くより音楽家たちを身近に感じてしまったのは、私だけだろうか。

何年も前になるが、やはり「音楽家の社会貢献・社会参画」について書いたことをここに再掲させていただく。改めて読み返して、まるで今起きていることを予見していたかのように思えたのだ。

ひとりの人間が、社会にどんなふうに関与できるのか、自分がどんな風に関与できるのか、という事は、他の人が決めてくれる、指示してくれるわけではないのです。誰もあなたの代わりにあなた自身のことを決めてはくれません（もしそういう人がでてくるとしたら、その人は最終的にあ

なたを支配して、自分の奴隷にしようとしている、くらいに考えた方が無難です。自分で想像力をいっぱい働かせることが大事。それでも他の人の気持ちの100%分かることはなくて、最後に行き着くのが「自分がその立場だったら、そんな境遇に置かれたら、何をしたいと思うだろうか」ということを思い巡らすことです。

自分が音楽家として、この社会に何が出来るか、何をすべきなのかを考えることは、自分自身のミッション・ステートメント、即ち、人生のぶれない軸を自分の中に定めることです。音楽という芸術が、それに耳を傾けてくれる他者(=聴き手)なしには成立しない、という本質に立ち戻ってみても、音楽家が社会貢献を考えるのは、とても自然なこと。社会「参画」という言葉は、自分はこういう姿勢で社会に関わると決めたあなたが、それを実際に行動に移すことを示しています。

2020年のキーワードのひとつに「分断」があった。あるいは「断絶」と言い換えてもいい。COVID-19が人類に突きつけたのは、「生き残りたいなら、ふれあうな、離れろ、いっしょにいるな」だった。音楽する人間にとっては致命的な要求、それでも音楽の力を信じて、この道をいくならば、この「分断」と「断絶」を越えてつながり直すために知恵を絞り、創造力をいっぱい働かせ、他の人たちに対して「自分がその立場だったら、そんな境遇に置かれたら、何をしたいと思うだろうか」に思いを巡らしてほしい。今は、それだけでも十分に「社会貢献」だ。

社会的課題などと大仰に考えず、誰ならば、今自分の音楽を必要としてくれるのかを考え、必要としているところにどうやったら音楽を届けられるのかに取り組み(現状、ここが一番大変、助けてくれるコミュニティをつくろう)、実際に届ける。そこで出会う聴き手が、音楽家の社会貢献とは何かを、指し示してくれるだろう。

地方のホールで、長年地元アーティストといっしょに学校でのアウトリーチ活動に取り組んで来た担当者が言った、「遠くの巨匠より目の前の若手です。東京から、外国から来演する演奏家のコンサートは全部中止になったけれど、小学校はアウトリーチを求めています。彼ら(地元アーティスト)がいるから、応えられる。」

お遍路笠にフェイスシールドを仕込んで、個人宅での短い訪問コンサートが続けたフルート奏者は、コンサートホールでの演奏は確かに演奏空間としても鑑賞空間としても理想的、言った後にこう続けた、「(家で演奏すると)聴衆の人からすると、1対1とか、1対2とか、それで演奏されると、みんな集中するんですよ。しかも、今皆さんが住んでいる日常が、非日常に変わるんですよ。いきなりリビングルームに現れて、笛を吹きだすんです。それって、すごく非日常だと思う。」

あなたの音楽は、誰が、どこで、どんな風に必要とされているのか、考える時間はまだある。大丈夫、音楽は、音楽家は essential だ。